

国産材流通の転換点

— 岡山県北における原木市売市場の分析 —

○川村 誠・井戸田祐子（京大農）・長谷川正（㈱オービック）

1 問題の所在 — 「日本型流通システム」の転換—

1960～90年代、国産材流通の特徴は、原木・製品市売市場を核とした住宅（在来工法）部材の供給システムにあった。システムの末端は、木材小売商と大工・工務店の連携による部材調達であり、住宅建築における化粧性の高い部材選択（「役物（やくもの）仕訳」）が行なわれた。この商品選択の影響は、流通段階を遡行して育林生産にも及んだ。輸入丸太を使用した「外材製材」ですら、このシステムに向けた供給を担っていたに過ぎない。世界的にみて、針葉樹材市場に独自の「日本型流通システム」と呼ぶことが適切である。

現在、各地で生じている市売取引の後退は、卸売市場という単なる部分システムの後退ではなく、「日本型流通システム」の後退ないし移行過程とみなすことができる。しかし、問題は、来るべき新たなシステムについて、理論的にも実証的にも十分明らかにされることのないまま、国際競争下のシステム転換を迫られているところにある。

本研究では、新たなシステム形成に向けたイノベーションが活発な岡山県北部を取上げ、国産材原木取引で生じている変化とシステム転換の関係を考察した。

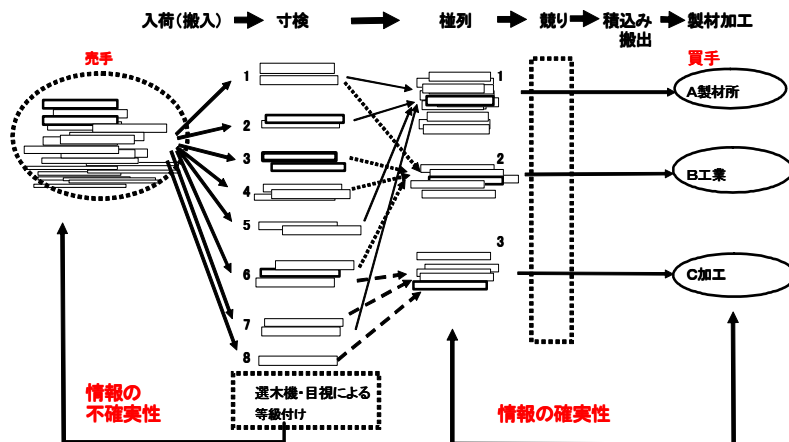
2 分析対象と方法

岡山県北部の真庭・津山製材産地における原木市売市場の取引実績を分析対象とした。本地域は、かつて角挽き製材を中心に製材工場の専門化が進み、「日本型流通システム」の主導的な産地を形成した。市場変化への対応も早く、原木市売では80年代既に小径木のロット販売が始まり、90年代には柱角加工の変化に対応して柱角原木のロット販売を普及させた。

研究方法は、産業組織論的な手法によって市売市場の売手・買手構造を明示するとともに、取引の単位である商品区分（「桧」仕訳）に着目して、市場流通の変化を分析する。

3 結果の検討

①商品区分別にみると、売手は多数であるが、買手の集中度が高い。②商品化のプロセスは、従来の役物仕訳から物理的欠点を中心とした材質仕訳に変化している。③入荷する原木に対して、単木的な一次仕訳（「寸検」）→二次仕訳（「桧列」）を通じて、買手毎のロット供給が進んでいる。つまり、市売市場を仕訳ヤードへ転換する方向で、新たなシステム形成に向かう可能性が高い。



（連絡先：川村 誠 mkawa@kais.kyoto-u.ac.jp）